

特集「人命環境アーカイブズの史料学」

この特集は、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」2016～2021年度（代表：小池淳一・木部暢子）国文学研究資料館ユニット「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」（代表：渡辺浩一）の研究成果の一部である。

「人命環境アーカイブズ」とは、人命を左右する災害・戦争・迫害といった状態に関連する文書資料を意味している。この特集では、過去の災害に関する文書資料についての論考を集めた。

澤井一彰「イスタンブルにおける歴史地震と文書史料—TSMA D.9567の成立を巡る一考察—」は、特定の被災記録がいつの地震に関する史料なのかという基礎的考察である。1648年から1766年かという従来二つの見解に対し、関連史料との綿密な比較対照により、いずれでもなく1719年の地震に関する史料であったという仮説が提示されている。

渡辺浩一「江戸町会所における施策決定の技法—承認印としての「小印」—」は、天明期連続複合災害への中長期対応として寛政4年(1792)に設置された江戸町会所という新組織における、文書往返の技法について分析する。新組織の立ち上げに伴う頻繁な関係者間の合意形成のために、「小印」という技法が使用されるようになったと推測する。

堀地明「『欽定辛酉工賑紀事』と嘉慶帝の天譴論」は、1801年の北京大洪水への災害対応記録を清朝皇帝が命じて編纂させたことについて、一次史料との突合せも含めて基礎的な考証をまず行う。そのうえで、天譴論という東アジアに共通する災害意識について論じたうえで、災害記録の編纂意図を明確化する。

岩淵令治「18世紀の〈消防教訓書〉と江戸町人の消防意識」は、いくつかの〈消防教訓書〉について概観したのち、『鎮火用心集』の内容を微細に分析した。さらに実態として滝沢馬琴の例も検討する。その結果として、江戸住民は「宵越しの金は持たない」のではなく、自己の財産の保全と自身の安全に最大の関心を抱いていたことを明らかにする。

以上により、被災記録、合意形成文書といった一次史料から編纂物、さらに出版物へと、文書実践の各局面¹⁾を端的に表す文書資料の分析を提示することができた。あわせて、イスタンブル・北京・江戸という世界各地の巨大都市における、それぞれに特徴的な大災害に関連する文書資料の多彩さも見ることもできる。

なお、「人命環境アーカイブズ」ユニットが行う、現在と未来に関する研究については、すでに、西村慎太郎編『新しい地域文化研究の可能性を求めて vol.5 地域歴史資料救出の先へ』（人間文化研究機構、2018年、非売品）を刊行したことを付言しておく。

また、本特集は、日本學術振興会・科学研究費・基盤B「自然と人間の相互関係史としての近世都市災害研究」（2018-2022年度、代表：渡辺浩一、課題番号18H00707）の研究成果の一部でもある。

（渡辺浩一）

1) 渡辺浩一『日本近世都市の文書と記憶』（勉誠出版、2014年）。

